
物神は宿り神

葉月陸斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

物神は宿り神

【Nコード】

N8229I

【作者名】

葉月陸斗

【あらすじ】

小さいころから画家の父親に連れられて世界中を巡っていた風波漱介。

十七歳の五月。漱介は両親から「そろそろ落ち着こう」と言われ故郷である日本に戻って来た。トラックに揺られながら、行く先は現代と自然が調和された町、諷詠町。そこで漱介を待っていたのは、「物」宿りし神々たちとの邂逅だった。

物を大切に心が紡ぐ、現代学園ファンタジーの開幕！

序幕：夢を見た感想

夢を見ていた。

長いようでいて、とても短かった夢を見ていた。

しかも、見ている時にそれが夢だとはっきり認識できる夢だった。そういう夢を見る時は何かが起こると前に誰かに聞いた気もするけど、まあ今この時にはあまり関係のない事だと思っ。

夢の内容はいたってシンプルだ。

今まで自分が訪れ、見て、触れて、触った様々な場所を走馬灯そうまとうのように一気に巡った夢だった。

深緑が日の光を受けて綺麗に輝いている森林。これまた日の光を受けて輝き、その光を浴びた砂が宝石のように見えた海。初めてセスナ機に乗った時に窓から見た穢けがれを知らない空。月に光に照らされる中、空から降り注ぐ雪の景色。太陽が沈んでいく様子をバツクにした歴史ある建造物。

それらが一瞬にして目に映り、そして過ぎ去っていった。

確かにあつという間だった。恐ろしいほどあつという間だった。

人の一生は、本当に走馬灯なのかもしれない。

今になって何でこんな夢を見たんだろう。

一つの場所に留まるということが殆どなかった、生まれてから今に至るこの十七年間。ある場所からある場所に移るときだってこんなことは無かった。

やっぱり……今回が「特別」だからだろうか。

もう二度と、各地を旅するようなことは無いから、こんな夢を見

たのだろうか。

結局の所、答えは出てきそうにない。

まあでも、これだけはハッキリとしている。

今この瞬間にも向かっている新しい土地での出会いに、俺はワクワクしている。

今度はどんな人たちと出会えるのだろうか。それだけあれば十分だった。

序幕・夢を見た感想（後書き）

えー、初めての人もそうでない人もいるとは思いますが、一応挨拶はしておきたいと思います。

一応、初めまして！ この小説の著者の葉月陸斗です。

このたびは「物神は宿り神」を読んでもらってありがとうございます。います。

初めてでない人は「連載二つも抱えてんのに何をやっているんだ・・・」なんて思っているかもしれないんですが、申し訳ないです。書きたかったんです・・・。

ゆっくりとではありますが、途中で止めることだけはしないので、どうかよろしくお願いします。

第一幕、一話・ゆれてゆれて夢うつ

ブロロロ、と一台のトラックのエンジン音が耳に伝わる。
全開にしている窓からは、五月が生み出す温かい風が入って来て
とても心地よく、眠気を誘うような無音の子守唄のよう。

外は住宅や木々などが見事に調和されていて、ごちゃごちゃとしたものを感じさせない。こんな所が日本に、しかも首都である東京に近い場所にあるとは信じられないような場所である。

「…………ふあ〜」

窓枠に肘をつけ頬杖をしているこの少年
かせなみそつすけ
風波漱介もまた、そんな景色を見ながら顔をとりんとさせていた。

「眠いか、漱介？」

「んーちよつと。やっぱり車の仲だと寝にくいな……………」

「確かに。一日近い距離を走ってるから、眠くならない方がおかしいか」

そう言うのは漱の隣、つまりは運転席に座っている父親の道浩。みちひろ
こちらは全くと言っていいほど眠気を感じていない様子。

一方の漱介は先程からうつらうつらとしていて明らかに眠そうにしている。まだ少年のような幼さを宿しておりながら、この年頃にはよく見られる複雑さをまったく感じさせず、明朗でありながらも静かさをまとっている。そう表現できるその顔には今は眠気が宿っている。

「そう言う親父は眠くないの？」

「俺か？ もう慣れてるからな。なんとも思わないな」

ふ〜ん。と気の抜けた返事をしてから、漱介は再び外の景色を見る。

漱介が持つ日本の建物のイメージは「ごちゃごちゃしていて統一性というものが全く感じられない」だったが、この町にある物はそれとは違っていた。それを表現できそうな言葉を智浩は知らなかったが、なんだかこの町は人を落ち着かせるような何かか辺りを漂っている。

「にしても、此処って本当に東京に近いの？ そんな感じが全くしないんだけど」

「近いつて言っても郊外だからな。でもまあ、確かに不思議だな。まるでこの場所だけ切り離されてるみたいだな」

「言িয়েて妙だね」

そう言って自分の髪をくしゃくしゃと掻^かく。

だんだんと住宅が多くなってきた。だがそれらは「ごちゃごちゃしていて統一性というものが全く感じられない」という訳ではなく、どこことなく自然な統一がそこにあった。

「そついや、母さんは何してるんだ？」

思い出したように振り返ってみるとそこでは一人の女性が身を縮めて幸せそうな顔で静かに寝息を立てていた。長く一つにまとめたある黒髪に「勇ましさ」という言葉が似合いそうな端正なその顔がそんな表情をしていると何故だか笑いが込み上げてくる。

「……………なんかいつもの母さんとは思えない顔だね」

「そつだな。でもまあ、ああいう所が可愛いんだよな。これが」

「はいはい分かってるよバカカップルめ」

呆れたように言い返す漱介に苦笑する道浩は「聡明」という言葉が似合いそうな風貌をしており、母親である智香とは全くと言っていいほど真逆だった。

「俺は今でも不思議に思うよ。なんで親父と母さんが結婚したのかって。七不思議の一つに取り上げてもいいくらいだ」

「ははっ。確かに俺だって最初に智香と会った時は結ばれるなんて思いもしなかったからな。人生って言うのは本当に分からないものだ」

「それは言えてるね」

はたから見れば普通にお似合いなような気がするが、息子と言う場所から見ている漱介はどうしてこんなにも正反対の二人が、と思ってしまう。

ブロロロ、とエンジンの音を耳に伝えながらそんな事を考えていたら、後ろの方でもそつと動く気配がした。振り返ってみると、智香が目をこすりながら起きた所だった。

「いつの間にか寝ちゃってたか……今何時？」

「おはよう母さん。因みに現在の時刻は午前十時ちよつと過ぎと言ったところかな」

「そう……。道浩、あとどれくらいで着きそつ？」

「これくらいのペースで走っていれば、あと三十分くらいだな」

三十分か……。そう心の中で呟くと、漱介はこの景色を目に焼き付けておこうとまた窓の外の方を見る。

現代と自然が調和された町、ふうえいちよう 諷詠町。

十数年前から近代化が始まっていながらも、昔の歴史ある街並みを失わずに現在もあり、それのおかげなのか何なのか。関東の中で唯一、過疎化が進んでいた地域だったが今ではすっかりその心配もどこ吹く風となっている。

そんなこの町に濑介、もとい風波家かぜなみは今日からこの町で暮らすことになっている。このトラックは引越し業者に頼むのが面倒だと言った道浩が、知り合いに頼んで借りた物なのだ（そんな知り合いが気になった濑介だったが、何故か教えてくれなかった）。

引越し、と聞けば他の人にとっては結構大きいイベントなのかもしれないが、こんな事をもう数え切れないほど経験している濑介は何とも思わなかった。

画家という特殊な職を持つ道浩は日本だけでなく世界でも割と名の知れた画家であり、新しい絵を描くために一か所にいたんでは面白くないということで、今までは日本や世界中、おもにヨーロッパの方を転々と濑介が生まれる前から巡っていた。そして濑介が生まれた後でもそれは変わらず、つい一週間前まではフランスで暮らしていたのだ。義務教育という法律さえもすっ飛ばしている風波家は一年を通して計四、五回は引越しをしている。

が、いったいどういった風の吹きまわしなのか気まぐれなのか。ちようど一か月前に道浩が「もうそろそろ一か所にとどまろうかな」なんて事を言い出したのである。最初は冗談だと思っていた濑介だったが、日が過ぎるにつれてだんだんと現実味を増し、最終的には故郷である日本に帰って来たという訳である。

久しぶりに吸った日本の空気は少し違和感があり、これからもずっとこんな感じなのかと思っていたが、この町だけは例外らしい。それに安心感を抱きつつ、これからどんな事が始まるのだろうか

いう期待感でいっぱいだった。

「……………」

いつの間にやら頼杖をつきながら眠りに落ちていた漱介。

トラックは既に目的の場所　三階建の新風波邸の前に止まっていた。

一階は道浩の仕事場、もといアトリエになっており、画材道具やらなんやらや道浩の私物を置く場所になっているため居住空間は二階からということになる。リビング、キッチン、風呂場などは全て二階にあり、三階は漱介の部屋と智香の部屋、そして風波夫妻の寝室の三部屋がある。

「漱介く着いたから起きろ」

と道浩が先程から起こしているが中々起きる気配が無い。よつぽど疲れが溜まっていたのか、規則正しい寝息をたてながらすすすと眠りについていた。

「ふむ。起きる気配なし、だな」

「起きないの？」

「ああ。しょうがないから担いでリビングにでも」

「それよりもっと手っ取り早い方法にした方がいいんじゃない？」

と、小さく笑いかける智香。それを見た道浩は苦笑する。

「因みに、その手っ取り早い方法って言うのは？」

「簡単よ。私の全身全霊の力を手に集中させて智浩の頭部にそれを叩きこめば」

別に何とも無く説明していると突然、何かが弾けたように目覚めた漱介。しきりに周りをきよろきよろしている。

「おっ、起きたか」

「うん……」

「ん？ 何かあったのか？」

「いやさ、なんか凄く冷たい何かを感じたような気がするんだけど……気のせいかな？」

首を傾げながら呟くように言う漱介。それを見ていた智香は「むー」と不満げに口を尖らせていた。

その様子を見ていた道浩は独り小さく笑いながら「さて、」と話を切り出す。

「とりあえず今日中に荷物は全部家の中に入れちゃわないとな。漱介は明日から学校だし、俺も早く始めたいしな」

「よし。じゃあここは私の出番だな」

そう言ってトラックの後ろの扉を開け中に入る。中からドンツ、ドンツという音が数回にわたって聞こえてきた後、智香が段ボールを片手に数個ずつ重ねて持って出てきた。

「とりあえず、家の中に入れていいのかな？」

「そうだな。何が入っているのかは蓋の部分に書いてあるから置いておくだけでいいよ」

「ふう。なんとか片付いた……」

ほっと一息つく漱介。

三階にある部屋は六畳と申し分ない広さで、そこには机や画集で埋め尽くされた本棚。道浩から貰った画材道具。ノートパソコン。布団などなど。

「今日から、ずっとここにいるんだよな……」

そう呟きながら、漱介は何か不思議なものを感じていた。

今まで色々な土地を行ったり来たり行ったり来たりしていたからか、一つの場所に留まるということが特別な事のように感じる。たぶん、小さい時からこういう生活を送って来たからこそ思うことではあるんだろう。普通だったら、どこか一つの場所に定住するというのが当たり前なのだから。

「明日から学校か……何か目まぐるしいな」

椅子に腰かけながら、漱介は窓の外を見る。

久しぶりに夕焼けというものをじっくりと見た気がした。フランスで暮らしていた頃は別段気にも留めなかったものなのに、どうして今になって気になるのか。もしかしたら、これから始まる新しい生活に不安でも感じているのか？ いや、それは無い。むしろ楽しみにしているくらいだ。

だったら、いったい何なのだろうか。

繰り返し自分に尋ねてみても、全く帰ってこない答え。

いやむしろ、答えなんてあるのか？

それすらも、多分分からない。

だったら……

「答えが出ないままでいいか」

ははっ、と笑って考えるのを止めた。

「そういえば……アリアからメールが来てるかも」

そう言うと、机に置いてあるノートパソコンを起動させる。

アリアというのはフランスで知り合った友達であり、道浩に師事していた。そんな彼女とは愁に二、三回はメールのやり取りをしている。

「えーと……あ、やっぱり来てた」

『ハイ、ソウスケ久しぶり！ って言っても、まだ一週間しか経ってないか……。でも、逆に言えばもう一週間経ったってことになるんだよね。あーあ、時間なんてあっという間に過ぎちゃうね。ソウスケと過ごしていた頃が懐かしいな。』

こっちは特に変わったことは何もないよ。みんないつも通り。ソウスケがいなくなってもみんな元気やってる。私は……ちょっと元気ないかも。

そうそう！ 報告があつたんだ。聞いて驚かないでよ。なんとメアリ先生が無事出産したの！ 元気でかわいい男の子だったよ！ ソウスケも一緒に見られたらよかったのにね。因みに、赤ちゃんの名前はまだ考え中。ソウスケも何か良い名前出してね。

そっちはどんな感じかな？ 最初にトウキョウで数日過ごしてから、フウエイチヨウ……。だったっけ？ とにかく、そこに行

くんだよね。

ソウスケの事だから何にも心配ないと思うけど、新しい環境で頑張ってる！

それとさ……まだ、勝負は終わってないからね。ソウスケに勝つまで諦めないよ！

それじゃあ、またね。返信、楽しみにしてるから。 by A

ria・Parlando』

ディスプレイに表示された文章を読み終わると、相変わらずだと苦笑し、自然と頬が緩んでいた自分に気付く。

「やっぱり、面白いやつだな」

何千キロも遠く離れている場所から、こつしたやり取りが出来るということにはやっぱりいいと思った。

その後、アリアへの返事をどのようにするかで、漱介は一時間も悩んだ。

断話：夜の道を歩くのは誰？

深夜。この時間が生み出す夜色が最も濃い時。

深夜。そんな夜とは真逆に自らが生み出す光を存分にふりまいて
いる月が出ている時。

深夜。なんだか幻想的な雰囲気を生み出している時。

そんな時間の夜の道。街灯は設置されてはいるが、都会にあるの
より少なく。光を照らすべきもの

が逆によるが生み出す闇に呑みこまれているよう。

「・・・・・・・・」

そんな時間の夜の道。誰かがその道を歩いていた。

その姿は闇にまぎれていてよく分からない。男か女なのかの区別
もつかない。

「・・・・・・・・」

「誰か」は静かに、静かにただ歩いていた。

「誰か」は足音を立てることなく、静かにただ歩いていた。

幽霊と言つ訳ではない。殆どその姿が見えないといっても、足は
ちゃんと地面についている。人が出
す気配もある。

「・・・・・・・・」

不意に、「誰か」が足を止めた。

「……………今日は来ない、の？」

初めて発した声。

その声は、年頃の少女のものだった。

その時、雲に隠れていた月が姿を現す。

それが生み出す光はほんのささやかなものに過ぎないが、それでも闇の中を照らすことは出来る。

月の光が、少女の姿を顕にする。

少女は学校の制服と思える物を着ていた。そこに変わった所は無い。

あるとすれば、腕に巻かれた幾つかの包帯と、左目につけている医療用の眼帯だろう。

それらが少女の纏う雰囲気神秘的なものにしていた。

「……………いつたい、いつまで続くのかな」

誰に言う訳でもなく、少女はぼつりと呟く。

そしてまた、闇の中へと歩み始めた。

断話：夜の道を歩くのは誰？（後書き）

久しぶりの連続投稿です！ 続けてどうぞ。

二話・不敵に笑うその人は…

「……………」

深夜。この時間が生み出す夜色が最も濃い時。

深夜。そんな夜とは真逆に自らが生み出す光を存分にふりまいて
いる月が出ている時。

深夜。なんだか幻想的な雰囲気を生み出している時。

「……………」

そんなこの時間。漱介は部屋の電気を消して眠りにつこうと先程
からちよつとばかり必死になっていたが、全然眠れないでいた。

色々な所に来てはすぐに引越すという生活をしてきた漱介はど
んな場所でも眠れるように自然となっていたが、今日に限って何故
かそれが出来なかった。

「……………眠れない」

寝むそうな声を出しているにも関わらず、二時間前からずっとこ
の調子。

どうしてかと、その理由を探してみると案外簡単に見つかった。

明日、新しい学校に行く事が楽しみで眠れないのだ。

まるで小学生が「あしたはえんそくだ」。たのしみだな」と
はしゃいでいるのと同等のレベルの理由ではあるが、無くそうと思
って無くせる物ではないので結局このままの状態が続いている。

そして、何にもしていないで横になっているとだんだん辛くなっ
てくる訳で。

「・・・・・・・・」

布団からムクリと起き上がると、本棚の方まで行ってちょうど読みかけてあった小説を取り出して読み始める。

「そっいえばどんな話が忘れてるな・・・・・・・・」

という訳で最初から読み始める事に。

カチツ。カチツ。と時計の針が刻まれる音が響く中、漱介は活字の世界に没頭している。本の虫、とまでは行かないでも割と本を読む漱介。今呼んでいるのはミステリで、昔出版されたものが文庫化して新しくなって出てきたシリーズものにハマっている。

時間だけが過ぎていく中、漱介は眠れなくて仕方なく読み始めた本にいつの間にか夢中になっていた。

「おはよー・・・・・・・・」

「おはよう。って、どうした漱介。随分眠たそうな顔だけど」

「うん・・・・・・・・何て言うのかな。やっぱり面白い小説っていうのは反則だと思う」

「？」

智香が首を傾げるが、漱介はあえて何も言わず、というより眠たくて言えず、黙って椅子に座る。

結局あの後、夢中になって読書に集中してしまい一睡も出来なかった。気がつけば夜が明けていて一日の始まりを告げる朝日が昇っ

ており、それを見て漱介は何だか自分を情けなく思ってしまった。

「ほらほら。そんな眠たそうな顔していたら何て思われるか分からないぞ。シャキツとするシャキツと」

そう言うつや、バンバンと漱介の背中を叩く。本人は軽く叩いたつもりだろうが叩かれた本人は予想外のダメージを食らい思わず「ぐおっ」と呻き声をあげる。

「分かってるよ。そういえば親父は？」

「まだ部屋で寝てるよ。何か昨日、夜遅くまで描いていたみたい。まったく……」

と呆れながら小さく溜息をつくが、それが本心ではない事を漱介は知っている。

「……朝から見せつけてくれるね」

「なっ、べ、別にそう言う訳じゃ」

「はいはい。そう言うことにしておくよ」

適当に流すと目の前に置かれている朝食を食べ始める。

しかし、親父は母さんに対してあんなに直球なのに、何で母さんは変化球ばかり投げるんだか。

心の中でそう呟くと漱介は母親の方を見る。

智香はこれと言った変化はなく、黙々と食べ進んでいるが、漱介は先程から智香の目がリビングのドアの方を時々盗み見るように動かしていることを見逃さなかった。

何だかんだ言っても、親父と大して変わらないな。

これが最近日本で言われているツンデレというやつなのだろうか。なんていう事を思考しているうちに朝食を食べ終えた。

まだパジャマ姿のままなので、一旦部屋に戻り今日から登校する高校の制服に袖を通す。フランスにいたときは制服ではなく私服だったので、実に二年とちょっとぶりなのである。

最近ではちよつと少なくなってきた学ランに着替えると、学校指定の鞆（中にはスケッチブックと鉛筆。携帯に音楽プレイヤーと漱介お気に入りのヘッドフォン。授業で使う筆記用具しか入っていない。教科書は今日もらうのだ）を手に持って下に降りる。

リビングに戻ってみると、そこには先程なかった道浩の姿が。パジャマ姿のまんまゆったりとコーヒーを飲んでいた。

漱介に気付くと、小さく笑う顔を見せる。

「おつ、懐かしいな〜学ラン。俺も学生の頃は学ランだったな〜」

「へえ。親父もそうだったんだ」

「ああ。にしても羨ましいな〜。俺ももう一度あの素晴らしかった時間に戻りたいものだ」

「戻って何するんだよ」

「そうだな・・・」

数秒、考えた後、

「智香と制服姿でイチャイチャしたいかな」

「うほっ!」

道浩の言葉に思わずお茶を詰まらせた智香。その顔はゆでダコのようになつて赤になっていた。

「なつ、何を言っているんだお前は！ あ、朝からそんな事を・・・」

「まあまあ良いじゃないか別に。それに本当のことなんだし」

「〜!」

何か言いたいのだろう。智香は顔を真っ赤にしながらば「ぼこと道浩を殴っているが、その姿には迫力が無く逆に可愛いと思ってしまうほど。」

「っと、ちょっとやり過ぎたか……ごめん智香」

そう言ってぎゅっと抱きしめる道浩。

「……バカ」

「ごめんごめん」

「……バカバカ」

「そうだな。確かに馬鹿だった」

「……」

道浩の腕の中でバカと連呼しながらもその抱擁から逃れようとはしない智香。むしろ胸に顔を埋めて幸せそうにしている。

「……はあ」

その様子を半分呆れて、そして半分諦めて眺めていた漱介は行っ
てきますも言わずにただ黙って学校に向かう事にした。

私立諷詠第一高校。この諷詠町にある二つの高校の内の一つであり、第二高校とは名前の通り同じ系列の学校である。

第二高校は理数系の方に主軸がなっているに対し、第一高校は文系を主軸としている。

校風は他の学校と比べてみると自由な所があり、生徒の自主性を重んじている（嫌な言い方をすれば生徒の自己責任）。その上で学業のレベルも割と高く、部活動も盛んに行われている。

今日は初日なので結構早めの登校。歩いてどれくらいなのか分からない。瀬介は、今日歩いてみて片道の時間を計る事に。

高校に行く道の途中、瀬介は周りの風景を見て「此処からだったらこうというのが描けるな」とか「あそこなんか良さそうだな・・・」・休みの日にでも言ってみよう」とか思ったりしていた。デッサンが好きな瀬介は休みの日になるとスケッチブックをシヨルダーバックにいれてぶらぶらしながら、気に入った場所があるとそこに座って描く、と言った事をやっている。今のはその下見みたいなものなのである。

そんなこんなして歩くこと十五分。目的地である諷詠第一高校の前まで来ていた。

後者は何処にであるような白いコンクリートのもので、唯一の違いは校庭の広さだろうか。小学校や中学校並にやたらと大きい。そういういえばと、瀬介は著と前に読んだ学校案内のパンフレットで秋になるとちよつとした規模の体育大会がある事を思い出す。

「なんか面白くなりそうだな」

ちよつとした期待を抱く瀬介だった。

校舎内に入り、まずは職員室に行つて担任になる教師と話をすることになっている。職員室はどこかときよるきよるしている、目の前から二人組の女子生徒が歩いてきた。

瀬介はあの二人に聞いてみようと思いをかける。

「あの、ちよつと失礼」

「？」

声をかけた片方の女子が不思議そうな眼で漱介を見てくる。

「えと、職員室ってどっちにありますか？」

「職員室？ それならこの先を行った所にありますけど……」

「そっか。どうもありがとう」

小さく微笑み返して行こうとすると、今度は逆に女子の方から声をかけられる。

「あの、あなたはいつたい……」

「ん？ ああ、今日からこの学校に転校してきたんだ。一応、学年は二年。よろしく」

「えっ、転校生!？」

目を丸くする二人の女子生徒。

「ああそっか。だから職員室の事を」

「そ。今日初めて来たからさ、場所が分からなくて……。。じや、失礼」

と、今度こそ二人を後にする漱介。途中、二人の会話が耳に入ってくる。

「ねえ、転校生って……」

「うん。二年って言ってたし、間違いないんじゃないかな」

「だよね……。。うーん、好みのタイプかも」

「あっ、やっぱりそう思う？ ちょっとボンヤリしてたけど、何かよかったな」

何て会話が聞こえてきたが、漱介は何の事なのだろうかと心の中で首を傾げるだけだった。

先程の女子生徒の言うとおり、職員室は歩いてちよっとの所にあつた。

コンコンと二回ノックをして扉を開ける。

「失礼します。今日から此処に通う事になった風波ですけど……」

と言って周りを見てみると、奥の方で漱介に向けて手で招いている女性が一人。そっちの方へ歩いてみると、女性が笑顔で迎える。

「風波漱介君。だな？」

腰まで伸ばしている黒い長髪。身長は宗助よりも少し低いぐらいで女性にしてみたら高い。そしてどことなく「不敵さ」を宿している整った顔を見た時、智香の顔が脳裏に浮かんできた。

「はい。えっと……東雲先生、ですか？」

「うむ。東雲梓しのめあまねだ。これからよろしく頼む」

漱介に手を差し出し、互いに握手をする。

「……」

「？」

東雲はどうしてか漱介の事をじっと見ている。どうしたのかと思つて顔を見た時、思わずハツとしてしまった。東雲の瞳を見た時、まるで自分の全てを見ているんじゃないかと錯覚しそうになる。そ

れほどまでに黒く深い瞳だった。

漱介の視線に気付いたのか「ああ、すまない」と小さく苦笑する。

「やれやれ。どうやら癖というのは中々治らないものらしいな。自分にも困ったものだ」

「えっ、それって」「だが」

漱介の言葉を遮ると、東雲は微笑して

「君はかなり面白いな。漱介君」

ぼん、と肩に手を置かれる漱介。

「面白い、ですか？」

「うむ。君は面白い。かなり、だ。ふふっ、今年は退屈せずに済みそうだな」

その言葉にどう返せばいいのか分からず「はあ………」と言葉を濁す。

「さて、一応簡単な説明をしてから教室に向かおう。その頃にはクラスの中で首を長くして待っているだろうしな」

「はい」

色々と分からない人だったが、とりあえず悪人ではないという事を知った漱介だった。

それからちよつと時間が過ぎた頃、漱介が入る事になっている二年三組ではちよつとした騒ぎになっていた。

それもそのはず。やはり自分たちのクラスに「転校生」が来るといふ事は一種のイベントのようなものだ。教室のあちこちでは生徒たちが漱介についての様々な予想を話し合っていた。

「うーん。いったいどんな人なんだろうね」

難しい顔をしながら唸っている鳶尾優衣いばしゆいもまたその一人だった。

茶色がかつた髪にあどけなさが残る顔。その姿はどこか、主人に甘えてくる子犬を連想させている。

「先生な〜んにも教えてくれないから、男の子なのか女の子なのかも分かんないよ」

「確かにね」

結衣の正面に座っている松永千恵まじながちえが同意するように頷く。

「まあ、東雲先生だしね。教えてくれない事なんて最初から分かってたけど」

「うーん、そうだけどさ……」

それは昨日、帰りのホームルームでの出来事だった。東雲から二、三の連絡事項が話され、後は帰るだけ　というところに突然「ああ、言い忘れていた。明日、うちのクラスに転校生が来るから」と一言。何でもないうちに伝えて職員室に戻っていった（東雲の時は始まりと終わりの号令が無い。理由はただ面倒だからということだけ）。

最初はいつたい何を言ったのかとクラス全員、鳩が豆鉄砲を食ら

ったような顔をしていたが、やがて言葉の意味を理解すると一瞬にして騒ぎ始めた。が、転校生に関する情報は一切なく、今この時も「謎の転校生」と呼ばれていた。

「せめて、男か女かぐらいは教えてくれてもいいのに」

千恵が拗ねるように言う。

「でもでも、分からない、っていうのも面白くて良いけどね」

無邪気に笑う優衣の笑顔は混じりけなしのとても澄んだものだった。

そんな優衣を見て千恵はほわ〜んとした顔になり、優衣の頭を撫でる。

「あ〜、やっぱり優衣はなごむな〜」

「うわっ。くすぐったいよ、千恵ちゃん」

「いいからいいから」

その時、ガララツと教室のドアが開かれる。東雲が来たのかと二人はドアの方を向いたが、入って来たのは女子生徒だった。

「おーいみんな。先生がそろそろ転校生連れてくるよ」

おおっ、と小さな歓声上がる。

「相川、どうして知ってるんだ？」

一人の男子が入って来た女子 もとい相川あいかわまな真奈に尋ねる。

「まあ、それはちょっと企業秘密ってやつかな。あつ、因みに転校生は男子だったよ」

言った途端、男子からは落胆の音が。女子からは興味あり、という声が同時に上がる。

「なんだ男かよー」

「まあでも、このクラス男子一人少ないからもしかしたら、って思ってたけどね」

「そっかー男子かー。どんな人なんだろう？」

みんなが思い思いの言葉を言う中、真奈は優衣と千恵の所へと行く。二人の所につくと「おかえりー」と真奈を出迎える。

「真奈ちゃん。転校生ってどんな人だった？」

「というより、何で男子って分かったの？」

二人の疑問に真奈はふふんと得意げな顔をして話し始める。

「あれは何て言うか、運が良かったとしか言えないな。ほら、今日は風紀委員の朝挨拶の日だったから早めに学校に来てたんだ」

「ああそっか。あんた風紀委員だったわね」

諷詠第一と第二の風紀委員会は毎朝校門の所に行つて挨拶運動というものを行っている。真奈は今日が当番の日でいつもより少し早めに来ていた。

「で、隣のクラスの友達と一緒に校門に行こうとしたら、一階の所で偶然会つたって訳」

「ふ〜ん。でも、何でわかったの？ 転校生だって」

「いやそれが、向こうから話しかけてきたんだよ。職員室はどっちなのか、って」

「へえ。で、感想はどうだったの？」

真奈はやたらと男子に対する評価が厳しい。瞬時に相手の全てを見ているのではないかと思わせるほどの観察眼の持ち主である。

「そうね……。一見すると、なんかボンヤリとしてるな〜って思った」

「ボンヤリ？」

「そう。ボンヤリ。それと、ふわふわしてる、かな」
「ふわふわ？」

二人は普段の真奈らしくない曖昧な表現に首を傾げる。

「でも、」

「でも？」

一拍置いて、

「けっこうよかった、かな」

そう話す真奈の顔はほんのりと赤みを帯びていた。

「へえ。マナちゃんが高評価を出すなんて珍しいね」

「ほんと。他には？」

「そうね……」

言いかけた所で、再びガラッとドアが開く音。そこから一人の女性 東雲が入って来た。

「ふむ。やっぱりこうなっていたか。別に構わないが、とりあえず全員、席に着くように」

東雲の一言で次第に喧騒が止んでいき、自分の席へと戻っていく。やがて全員が席に着くと、東雲は「ふむ。素直なのは良い事だ」と言って教卓へと向かう。

この学校内に東雲梓に立ち向かう事が出来る生徒、及び先生は誰一人としていないだろう。つねに余裕のある笑みを絶やさず、相手を試すような物言いをする。それに見合う実力を持っているのだ。

「さて、出欠席の確認の前に昨日話した転校生の紹介から始めるとするか。入って来てくれ」

ドアの方に声をかけると、ゆっくりとした足並みで教室に入ってくる少年が一人。もちろん漱介である。

大抵の人ならばここで緊張するかもしれないが、転校転校の繰り返しだった漱介にとってはもはや何の事もなく、先程真奈が話していた「ボンヤリ」としたものを纏まといながら教卓の傍まで行き、後ろにある黒板に自分の名前を書いていく。

描き終わると振り返り、簡単な自己紹介をする。

「えっと、初めまして。風波漱介って言います。これからよろしく」

そう言って小さく微笑んだ。

二話・不敵に笑うその人は…（後書き）

いかがでしょうか？ 感想などありましたら是非、宜しく願います。

三話：人との出会いは大切に その一

わいわい、がやがや。

今まで色々な所を転々としていたから、こうやって転校先のクラスメイトに囲まれる事には慣れていた。

わいわい、がやがや。

まあ、それも当然の事なのだろう。やっぱり転校生と言うものは珍しいものだし、それがどんな人物か、と言う「知りたい」という欲求も生まれるだろう。

それ自体は別に構わない。それは俺にだってある事だから、その事をいちいち気にはしない。むしろ、こういうのはクラスメイトとすぐに仲良くできる場でもあるので歓迎しているようなものだ。

ただ、

わいわい、がやがや。

・・・この尋常じゃない集まりっぷりには、戸惑わざるを得ないというか、なんと言うか。

「ねえねえ。前には何処に住んでたの？」

「風波は運動部とか興味あるか？ 特にサッカーとか」

「料理とかできる？ もしよかつたら、調理研究部とか興味無い？」

「本とか結構読む？ 君のお勧めの作家さんとか、よかつたら聞かせてよ」

「えっと、その。こ、恋人とか、いたりしますか・・・？」

ふうむ。実に多彩なジャンルに富んだ質問ばかりだ。そして何より、かなり友好的な人たちばかりだ。こういう親しみやすさは最近じゃ見かけないからな……。とつてもいい事だ。実に有り難い。しかし、これほどの数だと流石に対処しきれない。俺の耳と情報処理能力は聖徳太子様じゃないからな。

などと考えていた漱介だったが、やがて一人の女子生徒が前に出てきて質問攻めをしていた人たちを一旦鎮める。

「はいはいストップ。いきなりそんなに聞いたら彼だって困るでしょ。もうちょっと考えなさいっての」

「ぶーぶー、とちよつとした不平が辺りを飛ぶが、その女子生徒がギロリと火と睨みする事によってそれは解消した。

「全く……。あ、ええと、ごめんね。急にでびっくりしたでしょ」

「ん？ ああ、別に問題ないよ。有難う」

漱介の自己紹介後は事務的な連絡を少々して幕を閉じ、「さて、私は一旦教室に戻る。風波君に質問があるなら、今がチャンスだぞ」という言葉を残して去り、その直後、現在の状況になった次第。最初の内は一つ一つ丁寧に返していた漱介だったが、だんだんと質問の内容がごつちやごちやになってきてからは苦笑いを浮かべるしかなかったという訳である。

「あ、私はクラス委員の松永千恵ね。よろしくね、風波君」

「うん。こちらこそよろしく、千恵さん」

「!?!?」

いきなり名前で呼ばれるとは思っていなかったらしく、少々顔を赤らめる千恵。その事を知ってか知らずか（絶対に知らない）漱介はただ首を傾げるだけだったが、やがて自分がした事に気付き、

「ああ、そういうことか。いやさ、フランスにいたのが長かったから名前で呼ぶ癖がついちゃって」

「いや、別に呼びやすいので構わないけど……。というより、外国にいたの？」

「うん。親の都合ってやつでね」

漱介の言葉に周りにいた生徒たちがほんの少しざわめく。やはり帰国子女が珍しいのは世の常であろうか。

「びつくりした……。」と眩きながら落ち着きを取り戻す千恵。そこはやはり夢見る少女と言った所だろうか。

「へえ……。帰国子女なんだ。じゃあ日本は久しぶりなんだ」

「そういうこと。最近はネットとかで色々見えるけど、できればそう言う事も教えてくれると助かる」

「りょうかい。まかせといて」

なんて二人で話をしていると、その間に一人の小柄な女子生徒が一人入ってきた。先程千恵と話していた子犬少女の優衣である。

「じー……。」

「ん、優衣？」

「？」

現れるや否や、じっと漱介の事を険しい顔で見つめる優衣。

「……えっと、これはいい」

暫くの間その状態が続いたが、流石にしびれを切らした濑介が千恵に尋ねる。千恵の方もどうなっているのか分かっていない様子ではあったが、一応聞いてみる。

「えっと、優衣、どうしたの？」

と、優衣に聞いてみたら急に笑顔になり、

「うん。濑ちゃんに決まりだね！」

『・・・・・・・・・・は？』

出会って間もない二人のかなり息の合った疑問のアンサンブル。

「そ、そうちゃん？」

「そうですね！ 風波濑介の『濑』の字から濑ちゃん。いいですよ？」

「え、いやその・・・・・・・・」

あまりにも突発的な出来事に流石の濑介も少し混乱気味だったが、そこは風波濑介。人並み外れた理解力と包容力を持つ彼はその突発的出来事に対しても、

「そっか、濑ちゃんか・・・・・・・・面白いな」

「でしょ〜。あ、私は鳶尾優衣です。よろしくね〜」

自然と仲良くなっている二人を見て、「風波君か・・・・・・・・出来るわね」などと呟く千恵。

濑介の学校での出会いは、こんな感じで幕が上がった。

さてさて。時間はいきなり進んで昼休み。

初めての授業は何の問題もなく進んで行ったが、内心、漱介は溜息をついていた。

やはり、今までいた場所が場所だったので、学ぶ内容が全く違うのだ。日本史なんかは漱介自身が好きだった為、何の問題もなかったが、現代文、特に古典なんかは「日本語なのかと思ってしまっただけ。

これからが大変だと改めて思い知らされたのであった。

「あー……先が思いやられるなー」

少し前に千恵に案内されて行ってきた購買で買った弁当の蓋を開けながら（弁当があるという事を忘れていた）誰かに言うでもなく、ただ空気中を漂わせるように呟く。

「でも、仕方ないじゃない。二年くらいだっけ？ フランスにいたの。それだけいたら分からないなんて当然だっけ」

隣の席の千恵（偶然にも漱介の隣だったのだ）が慰めるように言う。

「でもでも漱ちゃん、日本史は完璧だったよ。そっちの方が難しくないの？」

千恵の前の席に逆に座っている優衣が尋ねてくる。

日本史の授業中、担当している講師の先生（たまに授業外の問題を誰かを指名して答えさせるため、生徒の間での評判はすこぶる悪い）が漱介を指名し、前回の授業を聞いていなければ分からないような問題を解いてみると言ってきたのだ。クラス中がその講師に不快感をあらわにしたが、指名された本人が何事もないようにすらすらと答えたため、講師は赤っ恥をかく事になった（その後、クラス全員から感謝と称賛を浴びた）。

「日本史は好きでさ。自分で色々と本を読んだりしてたから、自然と頭ん中に入ってるんだ」

「うう、いいな。そうやって得意なのがあるのって」

「優衣は全部が苦手だもんね」

「……勉強だけが人間のぜんぶじゃないもん」

などとしよぼくれる優衣。授業中、一、二回指されたが、おろおろするばかりでちゃんと答えられたものは何一つもなく、最終的には千恵の援護射撃で事なきを得ている。

その様子を見ていた漱介は小さく笑うと、ちょっと冷めた弁当をつつき始める。漱介がかつたのはハンバーグ弁当で冷めているのもかわらず、ふっくらとしていても美味しい一品となっていた。

「美味しい……。どうやら日本の弁当事情は格段に進歩しているらしい」

「そうですねすよ漱ちゃん。因みに優衣のおススメはから揚げ弁当だけだね」

「ふむ。明日はそれにしようかな。母さんもこっちに来て大変だろうし」

すっかり意気投合してしまった漱介と優衣。お互いに何処か共感できる所があるのだろう。出会ってすぐにこんなにも話が出ることは、どんなに人付き合いが良い人でもやっぱり難しい所である。

漱介は心の中で千恵と優衣に感謝していた。転校初日でここまで仲良くできる人が出来るとは思っていなかったから。やっぱりこうやって気軽に話せる相手がいることはこれほどありがたい事だ。

食べながら話すというのは行儀が悪い事ではあるが、千恵と優衣が話し手になって漱介が聞き手になるという構図で話を進めていった。所々でやはり分からない事があり、その度に漱介が尋ね、二人が（主に千恵が）その問いの答えを言うという事をしていった。

「そういえば、漱ちゃんのお父さんはどんな事をしてる人なの？」

そろそろ弁当の中身が無くなってきた頃、突然優衣が言い出す。

「あつ、そういえば私も気になってたんだ。外国に行く用事って言うところ……やっぱり商社マン？」

漱介は不意に、商社マンになった道浩を思い浮かべてみた。ピシッとスーツを着込み、さわやかな笑顔を浮かべる……。あまりにもそぐわないので想像を中断。一応真実の姿を言っておく事に。

「いや、それは絶対にあり得ないな。百パーセントあり得ないな」

「じゃあ、なに？」

「ん、画家だよ。絵を描く画家」

『画家!?!』

漱介の言葉に二人は驚く。

「……そんなに驚くこと、なのか？」

「いや、だって普通の人から見たら画家って言うのは特殊なものだし。少なくとも私の知り合いには画家の父親を持っている人はいないな」

「私も」。漱ちゃんはそれが普通なの？」

「そうだな。俺の周りの人は画家じゃなくても何かしらの芸術に携わっている人ばかりだな。だから一時期は、この世の大人は何かしらの芸術家なんだ、なんて思ってたくらいだし」

その言葉は冗談ではなく、それは漱介のいままでの環境そのものを表していた。

今まで出会ってきた大人の中で芸術に携わっていない人たちは、砂漠の中で掴んだほんの一握りの砂粒と同じ。自分と同年代の子は流石にそうではなかったが、それでも多い方だった。

それが漱介の「普通」であり、「日常」であった。

その日々が変わる事なんて、今までないと思っていた。

別に嫌悪は無い。それが当たり前だと思っていたのだから。

でも、これからはどうなるんだろう。

永住宣言をしたとはいえ、これから先、親父が日本を離れないなんて事は絶対はない。高校を卒業するまでは無いとは思っけど、数年先、今度は期間を限定してあっちに行くことは何度でもある。

そういう時、俺は親父についていくのか。

それは……分らない。

母さんは絶対についていくだろうな。口や態度じゃあんな事言うてるけど、親父と離れる事なんて微塵も考えてないんだから。

でも、まあ今は考えるのはやめよう。

俺は絵を描くのが好き。それでいいじゃないか。

こんなに複雑に考える必要は、今は無いんだから。

「風波君？」

「……………」

「おーい、漱ちゃん」

「……………」

「おー、やっと気付いた」

いつの間にやら考え込んでしまい、二人を心配させてしまった様子。

「あー、ごめん。ちょっと考え事を」

「えと、あんまり触れない方が良かった、かな」

「いやいや違っつて。そういう悲観的なものじゃないから。絶対」

勘違いしてしまっているのを慌てて直す漱介。

……………暫くは急に考えるのは控えた方がいいな。

何て事を考えていると、教室のドアが開く音。

「失礼。転校生の風波漱介君はいますか？」

そして自分の名を呼ぶ声。

聞こえた方を向いてみると、そこには一人の男子生徒が。

銀色のハーフフレームの眼鏡に知的で穏やかそうな顔立ちで、右の二の腕には『生徒会』と書かれた腕章。

それのおかげで生徒会の人間と言う事が分かったが、どういった理由で生徒会が自分に用があるのか全く分からない。問題を起こした訳でもあるまいし。

とはいえ、このまま名のらないという訳にもいかず。

「あ、はい。俺です」

小さく右手を挙げて立ち上がり、男子生徒の前まで歩く。すると、

「あれ？ お兄ちゃん？」

「ん？ ああ、優衣か。そういえば此処だったな、お前のクラス」

親しみのある笑みを浮かべる男子生徒。

優衣の言葉に漱介は今し方芽生えた疑問を言ってみる。

「お兄ちゃん？ ってことは……」

「あ、そういえば名前を言っていなかったね。三年のいちほつめつと鳶尾夕兎だ。その言葉から察するに、妹の優衣とはもう面識があるみたいだな」

男子生徒、もとい夕兎が言う。

「因みに、一応ここの生徒会の会長を務めている。今日はそっちでの用で来たんだ」

「用、と言いますと？」

「なに、簡単な事だよ。この学校について放課後、一通り案内しようかと思ってね。昨日こっちに引越してきたから後者の事について何も分かっていないから案内してやってくれ、と東雲先生からのお達しでね」

「東雲先生が？」

「そう。中々読めない人だけど、生徒の事はちゃんと考えてくれる人だからね」

その言葉を聞いて東雲の顔を思い浮かべる漱介。

最初にあつた時に見せた、あの不敵な笑みを浮かべながら腕を組んでいた。

「そう、ですか。でも、何で今ここに？」

「いや、やっぱりいきなりはまずいかなって思ってたね。ちょっとした挨拶だよ」

そう言っつて朗らかに笑う。

「お兄ちゃん。漱ちゃんに学校を案内するの？」

優衣が二人に歩み寄り、話に入ってくる。

「そのつもりだけど……漱ちゃんってなんだ？」

やはりと言っべきか、そこにツツコンできた夕兔。

「漱ちゃんは漱ちゃんなのです。それ以上でもそれ以下でもないんです」

「らしいです」

一応乗っしておく漱介。

「成程ね……。まあ、とりあえずそついう事だから宜しく」
「分かりました」

「お兄ちゃん。私と千恵ちゃんも一緒にいい？」

「えっ、ちよ、ちよつと優衣!？」

何で私まで、と言おうとした所で「すとつぷ!」と千恵の口を押さえるようにする(実際には身長が足りないので全然押さえているように見えないが)。

「千恵ちゃん、『たびはみちずれ』ってよく言うじゃないですか」
「いや、いきなりそんな事言われても」
「千恵ちゃん、何か用事でもあるの？」
「特には無いけど……」
「じゃあ決まり！！　と言う訳でお兄ちゃん、よろしく」

優衣は屈託のない笑顔をしている。

良い絵が描けそう。

それを見ていた漱介は何となくそう考えていた。

「分かった分かった。じゃあ、授業が終わったらこっちに来るから待ってる」

「りょうか〜い」

「風波君もそれでいいか？」

「ええ、俺の方は問題ないです」

「すまないな。じゃあ放課後にまた」

本当に申し訳なさそうな顔をしながら夕兎は帰っていった。
漱介は優衣の方を向くと、先程の会話の事を聞く。

「で、一体どうして」

「？　何が？」

「いや、どうして一緒に行くなんて言い出したのかわかって」

「そうよ。私も巻き込んでおいて」

千恵も会話に入ってくる。

そんな二人の「問い」に優衣が言った「答え」は、

「だって、面白そうだったんだもん」

『……………』

会話終了。そのまま二人は何も言う事なく自分の席へ。「えっ、だんまりはやめて〜」と嘘炉で騒いでいた優衣だったが、二人に相手される事なく放っておかれた。

席について一息つくくと、隣にいる千恵にある事を聞くことに。

「そついえば松永さん」

「? どうしたの? というか、呼び方変わってるね」

「まずかつたかなーって思ってた」

「別に、呼びやすいのでいいよ。逆に、今さら変えないでってとるかな」

「それもそうか・・・じゃあ千恵」

「・・・風波君ってさ、天然って言われたりしない?」

「? 別に」

「・・・そう。じゃあ、私も漱君でいいかな。こう言うのもなんだけど、風波って結構呼びづらくて」

「うん。全然オツケー」

千恵が顔を赤らめている理由が分からず、またもや首を傾げる漱介。まあ何でもないだろうと一人で片づけ、話を続ける。

「です。聞きたい事があるんだ」

「なに?」

「・・・あの二人って、本当の兄弟?」

どう考えても、あの二人が同じ母親のお腹の中から出てきたというのが信じられない。全くの真逆。表と裏。プラスとマイナス・・・あれ? これはなんか違う気がするけど、まあいっか。

その言葉を聞いた千恵はぷっ、と小さく笑う。

「確かに全然似てないよね。でもご安心を。れっきとした鳶尾兄妹だから」

「ふーん。そっか」

とは聞いたものの、やっぱり信じられないでいる漱介だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8229i/>

物神は宿り神

2010年10月14日15時01分発行